
遠く、澄み渡る空に想いをこめて

雨ル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠く、澄み渡る空に想いをこめて

【著者名】

Z8909C

【作者名】

雨ル

【あらすじ】

それは運命じゃなく、それでも僕らは出会った。これは断崖の孤島のような学校で始まる物語。心に傷や闇を抱えた者が織りなす、たつた一雲の物語。

運命とか、そんなまるでこの世界が一から千まで、決められたものだとは信じていな。

それでも人は日常の変化に搖す振られながら今という道を歩いていることに意味があるのだと信じたい。

人はどこかで出会い、別れる。

例えば、ありふれた毎日の中で家に引きこもってさえいなければ、私たちはいずれ出会うかもしない。

そしてそこで永遠の別れになるかもしない。

私たちが出会う人間の数は限りなく無限大である。
けれど、私たちはその一握りしか知ることはできない。

何のふれあいのない、スーパーで見かけた主婦のことなど逐一把握できるわけがない。

だから僕は思うんだ。

人が、人には意味がある。

いくつも選択肢の中から選び出された出会い。

確率で言えば、天文学的……いやそれ以上。

きつとそれは大切にしていかなくてはいけないとと思う。

だから僕は……。

これから始まる様々な出会いを　奇跡だと信じた。

introduction (後書き)

長編といつも無謀なことを試みてしまった、雨ルです。

正直に書こましょ。書き始めて初っ端詰まりました
どうしようもないことはこのことなんでしょうか。

そんなこんなで始まってしまったこの物語。いつたいじつなるのか
自分でも分からぬ状況です。

でも、それでも読んでいただけるのならうれしいです。

たぶん不定期になっちゃいます、確實に不定期です。

どうか、温かい田で見てやつてほしきです。なるべく努力はしたい
ので。

そんなこんなでどうかよろしくお願いいたします。

それと、なにか意見や気がついたことがあれば気軽にピーチ。お待
ちしてます。

それでは長々と失礼しました。

第一話 【奇妙な物語の前には、不幸な物語を】

風がとても清々しかった。

空は果てまで続くよう広がり、なによりも深く爽やかな蒼だった。

以前住みなれた都会と比べると、空を覆い隠すようなビルもなく自然的なものだった。

「すごく、広い空だ」

それが有名な芸術品であるかのような趣に思わず声がこぼれた。それと同時にこれから三年間、この場所で暮らしていくことを再確認した。

自然と笑みを浮かべる。

これから始まる新しい生活。

不安もあるが、期待の方が大きい。

「そして、もうあの頃とは違うんだ」

些細な、心温まるような感情に駆られる。

僕を急かすように吹きあがる春風。

木々の間から零れるように降り注ぐ木漏れ日。

風光明媚なこの場所で。

僕は新たに出会う誰かに心を踊らされていた。

今なら高くそびえたつこの山も、口笛を吹きながら登れるような気がした。

僕はこの春から、皇稜学園に入学することが決まった。

皇稜学園とは成績優秀、品行良好でしらでいるいくらか有名な私立の高等学校だった。

立地は人里離れたちよつとした山奥にあるため全寮制。

交通の悪さ、浮世離れな立地、保護者から離れての一人暮らしと

いつた、不安要素の激しい学校だがそこを通つのには利点があつた。なぜそんな山奥に建物を造つたかといつと、高校あるまじき敷地面積を確保するためだつた。

普通の高校の施設は当たり前のこと、様々な研究等の施設を初め、ショッピング、アミューズメント、その他様々な必要なものがすべて学内にそろつてしまつていた。

まるで山奥に新たに町ができてしまつたようなところだつた。

そのため、今まで考えていた不安要素は一つ消えてしまい、まあ考えた所では一人暮らしさえもプラス要素に思えてくるのである。だがここまでくると、次に考えてしまつるのは家計のことだらうか。勉強するのに、青春時代を送るのに申し分ない施設を運営するのは実に困難極まりないものであらう。

ここまでくるとある種、道楽のよつてわえ思えてくる。

しかしこうか、まことに申しすらこのだが意外と生徒が受け持つ費用は少ない。

他の高校で払う授業費と同じくらいで、過いすことは出来ぬ。と、いうかぶっちゃつけ宿舎代も考えるとはるかに安いんではないだらうか。

両親も真つ青である。

母親が毎日の弁当作りを放棄できると某掲示板では話題にもなつたりしてゐる。

なぜ、そこまで安いかと言つと……こちの話はやめよう。

いやはや、まさか学校や国に對して喧嘩を売るわけにはいかない

や。

貪欲に勉学を励む若者にそんな社会の裏側を見せるような……断じて考えてなかつたから端折つたとかではないからな。うん。

こうなれば、お国に貢献している〇Bや〇Gの寄付金が支えていふと言えよう。

そんなわけで、運よく超激戦の果て合格通知を獲得できたわけで、

僕はその校門までやつて來た。

周りには、緊張した表情を浮かべながらいそいそと校舎に入つて行く新入生。

「僕も、ここから始まるのか」

春の季節は新鮮な空氣と共に、人を期待させる。

僕は目の前にそびえたつ校舎を前に、小さく息を吸い込んだ。ここから始まるんだ。

まだ知らない出会いがここにはたくさんあるんだ。

そう考えると、心が温まつた。

そう、ここから始まる。

僕は、期待と緊張を入り混ぜながらも校門をくぐつて行つた。

このときはまだ知らなかつた。

僕はこのあと、どん底に突き落とされることを。

春は、とても温かかつた。

しかし、春は【春眠暁を覚えず】

目がさめるまで、だいぶ夢を見ていたようだ。

まさに、ここは僕が求める高校そのものだつた。

各教室を覗けば皆一様に期待に満ち溢れている顔。

緊張しながらも、早く親しもうと席の前後の人々に声をかけたり、軽く談笑を興じている人たちがいる。

僕も早く自分のクラスを見つけて、いろんな人と話がしたかった。足早に教室のドアに貼つてある名簿を確認すると次の教室に向かつた。

「おつかしいな」

新入生には全部で五つの教室が用意されているが、今までの四つ

の教室はどれもはずれだつたらしくひとつ最後の教室だけが残された。

しかし、いくら名簿を眺めても僕の名前はどこにもなく途方に暮れていた。

「見落としどか、ないよな」

さすがに、学校側が僕の名前を見落とすわけがない。だとすると、期待と焦りで僕自身が見落としている可能性が高い。また、探してみるかと思ったその時だつた。

ありきたりの電子音と共に天井についているスピーカーから声が

聞こえてくる。

”新入生の秋里 恭一 君、いましたら至急職員室までお願いします”

なんか、もうすでに呼び出されている人いるよ。

いつたい何したんだろ、至急だとさ。

それにしたつて、秋里つて……あれ聞いたことがあるよ。

秋里……秋里、恭一？

「つて、僕のことか」

なぜか、こうフルネームで呼ばれると一瞬戸惑いつ。

そんなことよりも僕は先ほどの放送に従い、職員室に向かう。

「きっと、教室のこととかな？」

やはり、学校側の見落としか……。

なんというか、初っ端ハプニングとは先が思いやられる。

いやこれは、主人公の素質というやつなのか！？

そんな馬鹿な事を考えながら、足を止めた。

止めた？とめた？トメタ？

あーそういうえば、僕。

「職員室の場所わかんないよ……」

ははは……。

なんだか僕はほんとべタな人生を歩んでる気がする。

なんていふか、この世界は僕を中心に回っているように感じた。

迷いに迷つてやつと辿り着いた職員室では、僕の予想を180度、いや三回転しておつりがくねぐらうに奇怪な方向に進んだ話をされた。

ようするに、僕はここに予想外の事実を告げられた。

「僕の教室がない……」

いやそもそも席さえもないと半ば皮肉氣味に告げられる。

「いや、意味が」

「だから先ほどから何回も言つているだらう」

威圧するように攻撃的な教頭と、先ほどから済まなそうな顔を浮かべたまま顔を上げない校長。

初めはなんかのドッキリかと思つたが、次第にその余裕さえも崩れていった。

「こちら側は、多少のミスはあったがその後すぐに訂正の手は打つた。そちら側の確認が取れないと思つたら、やはりこういった事態になつたか」

やれやれと面倒そうに肩をすくめる教頭。

その高圧的な態度に腹が立つた。

「しかし、それはそつちの都合であつて僕は入学手続きも終えている」

「君、ほんと理解力が少ないようだね」

話の発端は僕に何らかのミスで合格届けが渡つたことから始まる。しかしそれをすぐに気付いた学校側は謝罪の手紙を送つたが僕はそれを受け取ることができず、今に至る。

それもそのはずだらう。

合格届けを受け取つたあとすぐに入学手続きを終え、そのまま両親は外国へと向かった。

僕が入寮の際に負い目を感じさせないようこいつ配慮だったのだろうが、今はそれが凶と出た。

以前両親がいたマンションはすでに解約し、僕も両親が外国にい

つたその日に親戚の家に預けられた。

そういうたすれ違いにより、僕はてっきり先ほどまで合格したのだと思つていた。

そして今、この多分意味のないであろう問答を続けている。

「君もしつこいな、我々には君に付き合つてこる時間はないんだよ」
「そういうてわざとらしく時計を一瞥する。

「じゃあ、僕はどうすればいいんですか」

「それは知らないよ、そこまでは我々は責任を負えない」
「責任を負えない……、ひどく嫌悪を感じた。

「……訴えてやる」

「なんか言つたか？」

「訴えてやるつて言つたんだよ」

「でも訴えてどうなるんだろう。

僕はこの先いつたいどうすればいいんだろう。

どこの学校に行けばいいんだろう。

両親は今外国にいる。

そもそも住む場所もない。

「ようするにあれか、金が欲しいのか」

「なんて下品な笑い方だろう。

正直、ここにいたくない。

こんな教員が世の中にいていいんだろうか。

「もう、いいです。こっちから願い下げです」

そういうとその教頭に背を向けた。

もう顔も見たくなかった。

どうしてこんな大人がいるんだろう。

どうして世の中こんなに腐つてんだろう。

「初めからそうしてればいいんだ」

そういうと、黒い皮靴で音を立てながら歩くと、僕の耳もとで小さく囁いた。

”「この世には、逆らつちゃいけないものがあるんだよ。もう少しで

口を滑らせるところだつたよ

背中から厭な汗が零れてきた。

体温が急激に下がつた気がする。

”……なあハンザイシャ”

最後にそう呟くと、また下品な笑みを浮かべて僕の横を通りて行つた。

僕は、尋常でない悪寒を感じるとその場で足が震えた。

犯罪者。

その言葉がひどく僕を狂わせた。

僕はそのまま氣を失つた。

気がつくとそこは闇だつた。

どこまでも続く闇。

僕らは身を震わせた。

微かに声が聞こえた。

誰かの悲鳴、笑い声、紅い飛沫。

あいつらはいつも楽しそうだつた。

なにもかも狂つてゐると思つた。

何よりも僕も狂つてゐると思つた。

微かに聞こえる悲鳴も、笑い声も、紅い飛沫も。

全部、全ブ、ぼくが……。

「僕が!」

ものすじく吐き氣がした。

あの暗い闇。

身の引き裂かれるような悲鳴。

何もかもがリアルだつた。

けれど、こうして目が覚めると急に冷静になる自分がとても醜か

つた。

「なんだ、夢か」

額の汗を拭い、心を落ち着かせるよう深呼吸するとよつやく僕の世界が見えてくる。

見覚えのないベッド。

鼻を軽く刺激する消毒液の匂い。

そして、僕の顔の上には先ほど見た顔があった。

「やあ、どうやら気がついたようだね」

僕とその人の視線が合つとその人は温かい笑みを浮かべた。

「……校長、先生？」

先ほど僕と教頭の口論を済まなさうに傍観していた人物。

その人は僕が眼を覚ますととてもうれしそうに笑った。

「よかつた、よかつた。体に異常はないかね？」

僕が顔を起こすのをそつと支えてくれる。

「いえ、大丈夫だと思います」

そうは言つが、多分僕はいま血色の悪い顔になつてているだろう。すぐに僕は立ち上がりうつとすると、静かに僕の体を制してくれる。

「まだ、ちょっと休んでいなさい。顔色が優れないようだ」
僕はおとなしくそれに従うと、また体をベッドに沈めた。

再び、校長先生は笑顔に戻った。

その笑顔はとても心地が良かつた。

作つてゐるわけでもなく、ありのままの笑顔。

まるで、孫を愛でる祖父のような寛容な笑みだつた。

「いろいろとすまなかつたね」

しばらくして、どこからかお茶を持ってきてそつとベッドの脇のテーブルに置いた。

「……いえ」

僕はそれが先ほどの問答であることを理解して、遅れながら首を振つた。

いろいろあつたが、自分にも非があつたのではと考へると仕方のないことのように思える。

「大丈夫ですよ、覚悟はできましたから、
そういうて、軽く笑いかける。
つまく笑えているだろ'つか？」

「…………」

校長先生は顔を下げる、無言のままある書類を取り出した。
僕は茶色い大きい封筒に印線をやると、校長は僕の手に渡した。
「これは……？」
その袋を開けると中からいくつかのパンフレットと資料が出てくる。

パンフレットには綺麗な学校が描かれ、麗美な風景が映っていた。
「勝手だとは思うが、君の入学手続きを済ませてしまつた」
資料の奥の方からは新入生の「案内」などといった資料がまぎれ
ている。

「そ、そのだな。本当に勝手だと思つたのだが、一応そつち校長と
は面識があつたし、寮もあつたし、君が良ければ……」

それだけ言うと僕の返事を待つてゐるだろ'つか、口を噤んだ。
きつと責任の表れなのだろ'つか。

知らぬ間に決められた、入学取り消し。
僕にしてみれば理不尽極まりないこと。

それに責任を感じた校長は、いくつもの学校に頭を下げたのだろう。

「うして親身になつて陰ながら苦労している人には好意が湧く。
「ありがとうございます。その申し出ありがたく頂くとします」
僕は頭を下げる、校長も頭を下げた。

「いらっしゃすまなかつたね」

あー、なんだろう。ものすごく惜しい。

こんな教職員がいるところに是非とも入学したかったもんだ。

「それでこちらの学校なのだがね……」

皇陵学園と共にとても有名なお嬢様校。

昨年に少子化だので生徒数を確保できないので共学校となり、女学院から学院へと名前が変わった。

噂によれば、その学院に通うのは生糸のお嬢様ばかりで、生半可な家柄のものは受け入れられないらしい。

しかし昨今の現状で多少の融通はきくものの、まだやはり女学院としての名残を残して男子生徒は実に少ない。 いても、どいつも有力の家柄の至宝ばかりで、平凡な学生などは存在できない。

それと、政界財界に関わっているものばかりなので、セキュリティーに関しては厳重である。

誘拐など、国的一大事に関わることを未然に防ぐために山奥に建てられているとのことである。

僕はそのパンフレットに軽く眼を通すと、校長を見上げた。
「僕のような、平凡なものがこのようないつてもいいのですか？」

どこを見ても優雅という言葉が当てはまる場所。

そんな場所に優雅でもない僕が入るうとしている。

「ああ、そちらの校長がね、快く受け入れてくれたんだよ」
それにしたって……あ、学費とかものすごく高そう。

急いで、ページをめくる。

「それとな学費については、この学校と同じくらいでいいやうだから遠慮はいらないぞ」

「あ、はい」

僕は、ページをめくる手を止めると、パンフレットを手から離した。

なぜ、こんなにうまい具合に話が進むのだろうか。

疑問におもわないわけがない。

平凡で取り柄のない僕がなぜ、いつもうまく有名な場所に入学す

るのか疑問だつた。

先のこととて臆病になつていたのかもしねりない。

また絶望を感じることに恐怖をおぼえていたのかもしねりない。

しかし、これも一つの出会いだということに収束する。

いくつもの偶然や、奇跡により差し出された道であるひとつ、そこにはいくつもの出会いがある。

人はそれを必然だといつ。それ以外になにものであつていいわけでない。

だからこれは僕にとつて必然。

このまま入学をするかしないか、どちらを選んでも必然となる。

僕はそのまま笑つた。

僕にとつてどちらが面白いか。

そんなの答えは初めから決まつていて。

「ぜひ、僕を西勾華学院に入学させてください」

僕なら、想像もつかない未来を求める。

きつとそれが僕の出会いなのだから。

僕が選んだ道。

その先には多くの問題が待ち受けていた。

僕はこの先いくつ絶望するだろうか。

そう考へると、僕は少しだけ笑つた。

現状は難しい方がより楽しい。

何かを成し遂げた先に喜びが待つていて。

僕は静かに、でもたしかにその扉を開いた。

物語は今始つた。

そこは風光明媚な山の奥。

しかしそこは、断崖に面した孤島の流刑地だつたのかもしねりない。

第一話 【奇妙な物語の前編は、不幸な物語を】（後書き）

あとがきはすでに「Introduction」で書いてしまった雨ルです。

とつあえず投稿する前に「」まで書いておきましたがやめて「」のあとで「」をします。

いや、もうなんか今回のタイトルから暴走します。で「」をします。

それに何だら「」の現実離れの甚だしさ。

この皇稜学園とはいつたいたい何ものだら「」。

なんだよ学園都市つて……。

以上、今回の話は俺の願望でした。

そういうわけで、始まってしまいましたが、まだ始まつてないわけ

で（いや、どちらか）

これからもがんばって行こうと思っていますの、なにかがよろしくお願いします。

次回、【潜入！皇稜都市は俺の支配下におさまったぜ】、他一本でお送りします（嘘です）。

それではまた会える日まで。

第一話 【ひと時の平穡は、起じつゆへ風の前触れ】

僕は、調子が戻ると毎頃に皇稟学園を離れた。

昼食を誘い続ける校長を何度も振り切ることは難しかつたが、ようやく逃げ出してきた。

途中、立ち寄ったコンビニで手に入れた菓子パンをおもむろにかぶりつくとよつやく一息つく。

「それにしたつて……無料販売のコンビニついでにいこうだよ」

皇稟学園街の奇抜さに思わず溜息ができる。

コンビニエンスストアの領域を飛び越えて、提供所になりつつある。

「それでもなんでレジがあつたのかな？」

律儀にレジには人が立つていて、しかも挨拶までしていた。

僕は通常通りレジまで商品を持つていくと、バーコードをスキャンされただけで、レシートを渡された。

なんつーか、道楽だわ、ホント。

全部において常識はずれの学園から逃げ帰るように出てしまつて、よつやく本物の空気を吸つた気がした。

片手にパンをむかぼりながら歩くと、一台の黒塗りの立派な車が止まった。

一種の条件反射みたいなもので飛び退くと、運転席からこれまた黒いスーツを着た若い青年が出てきた。

「叔父様の命でやつてきました。わあ、秋里様お乗りください」

そういうながら、後のドアを開く。

僕は、しばしそのスーツの男性と車を見ながら、最後に自分自身を指した。

「さ、どうぞお乗りください」

男性は爽やかな笑みを浮かべたまま、動じることはなかつた。

僕はわけも分からずその車に乗ると、混乱する頭を支えながら静

かに発進するのを待つた。

「秋里様、話は伺つております。その節はどうも御気の毒でした」
「ずっと同じような景色の坂を登り続けているのを窓越しから眺め
ていると、不意に男性は口を開いた。

「え？」

「あつ、これは失言でした。申し遅れましたが、私、曾我そが 昭文あきふみ と申しまして、先に訪れられました皇陵学園の校長の親戚にあたります」

バツクミラーから、図られたかのような笑みを浮かべられた。

「はあ、僕は秋里 恭一といいます」

押されるように自己紹介すると、昭文さんは頭を深く下げた。

「はい、秋里様、以後お見知り置きを」

「あの、すいません、できれば恭一と呼んでもらいますか？」

話されるたびに秋里を聞くのはどうも心苦しい。

そう訂正すると、言及はしようとせずに首を縦に動かした。

「恭一様は、もしや徒步で西勾華学院に向かつつもりでしたか？」

「いえ、近くでバスでも拾おうかと思つてました」

と、言つても先ほどから外を見てもバス停は見つからなかつた。

それどころか途中から人の気配すら感じられない。

「恭一様それは、多少無理があります。この辺りはバスは走つてないんですよ」

なるほど先ほどからバス停を見ていなかつたのは、もともとないからだつたのか。

「それにこには非常にわかりにくい地形をしています。まず恭一様ひとりで歩くには高確率で遭難してしまいます」

危なかつたですねと柔和に笑う。

僕は思わず苦笑した。

「どうしてそんなところに学院が……」

思い立つた疑問を浮かべた。

昭文さんは少し辛そうな表情を浮かべた後、いつもの笑顔に戻つて答えた。

「……そうですね、まあ一つの防犯装置と言つことでしょう。それと……」

昭文さんは他になにか言いたそうにして口を噤んだ。

確かに、西勾華学院には多くの著名人の子が集まつてゐる。

そのためのセキュリティーを考えると納得がいく。

「それでですね、私は西勾華学院のお手伝いとして執事を務めさせていただいております。分からないうことがあれば何でもおっしゃつてください」

「あっ、はい」ちりこりとよろしくお願いします

それだけ言つと視線を窓の外に向ける。

辺りには黒々とした森林が広がつてゐる。

確かにこの状態なら遭難してもおかしくないだろう。

それにしても……。

「なんだか寂れた場所だな」

小声でつぶやいた。

昭文さんは、肩をぴくりと動かしただけで返事は返さなかつた。

その後僕は何も語らずに窓越しに映る僕を睨み続けていた。

「恭一様、そろそろ着きますよ」

代り映えのない景色が少しだけ動いた。

闇に包まれた森林を侵すように少しづつ光が流れ込んでくる。

皇陵学園を出発しておよそ三十分だろうか、案外遠くはないようだつた。

そして、次の瞬間にはまるで世界が変わつたように強い光に包まれた。

「……」

僕は思わず息をのんだ。

鬱蒼とした森林の先に現れたのは、ひつそりとそびえ立つ国外を思わせるしつとりとした洋館だった。

樹海を円状に切り取られた中心に校舎が建ち、中心から少し斜め奥に巨大な時計塔が建っていた。

敷地面積はそれこそ皇稜学園に劣るが、申し分ない広さが備わっている。

昭文さんは駐車場の一区画に車を停車すると、運転席から後ろに振りかえる。

「長らくお待たせしました、今ドアをお開けしますのでお待ちください」

「い、いえそれくらい自分でしますの」

僕は車のドアを開き車から降りる。

それと同時におやおやといった顔で昭文さんも車から降りた。

「お疲れのところ申し訳ありませんが、今からですと入学式には間に合いませんが、ちょっとした説明会になら参加できますがどうしますか」

正直なところ疲れていないわけではない。

けれど、心身の疲労よりも僕には新しい学校のほうに興味があつた。

「いえ、それほど疲れていませんので教室に向かいましょう」

「はい、と昭文さんは頷くと大きめの紙袋を手渡す。

「そちらに着替えが入っているのでトイレででも着替えてください」と昭文さんはぬかりはないようだった。

「それでは参りましょうか」

僕は置いてかれないように昭文さんの後を追つた。

「ここが新しい学校か」

急いでいるのでそんなに観察できなかつたが、悪くはない。少しだけ足を弾ませながら駐車場を後にした。

長々とした廊下を音もたてず歩いている。

洋館の中は見た目以上に広く感じ、代り映えのしない風景は僕を迷わせた。

「意外と広いんですね」

広々とした学校はすでに皇稟学園で慣れていたが、ここは違う意味で広く感じた。

「そうですか？ 敷地面積は通常の高等学校と変わりないと思いますけど」

「多分、こういった洋館を訪れるのは初めてなもんで」

それを聞くと、昭文さんは笑いだす。

「迷わないように注意してくださいね」

僕は置いてかれないように早足で歩いた。

それにしても、廊下には絨毯。

壁には等間隔に絵画。

そして極めつけは所々に置いてある彫刻とはいつたじ何なんだろう。

「これっていくらぐらいなんですか？」

僕は好奇心のあまり、手みじかにある絵画を指さすと昭文さんに尋ねる。

「あ、えーと、それは有名な外国の絵師の作品で家ぐらいは余裕で買えますね」

あー、聞かなきやよかつた。

これから廊下を歩くときは最大限の注意を払わなくては。

「恭一様そろそろです、と、おや」

前方からは一人の可憐な女の子。

毛先にウェーブがかかった肩よりも長めに伸びた髪が彼女が歩く「」と揺れる。

瞳は黒く、しかし深く青みを帯びており宝石のようだった。

背丈はそれほど高くなく、華奢な体形をしている。

僕は彼女がまるでガラスのように見えた。

それが当たり前のように常に気品を保つて、でもそれは作り物の
ような彼女であり。

彼女自身、自分がそういうふうな人間を望んでいなく。

そして、一たび落ちてしまえば、ガラスの破片となり粉々になる。

宝石のように見えて、それは一種の贋作。

なんでこんなことを思つてしまつたのだろうか。

彼女の周りをとりまく張りつめた空気が重々しかつた。

もしかしたら彼女とすれ違う直前にその空気に当たられたのかも
しれない。

「苦しい……か」

そういえば、すれ違う瞬間に彼女と目があつた。

それはとても冷たく、悲痛な瞳だった。

「いやはや、恭一様お恥ずかしいとこりお見せしてしまつて申し訳
ありません」

彼女が見えなくなつてから昭文さんは苦しそうに笑いながら言つ
た。

「いえ、別に。それより先ほどの方は」

「彼女は恭一様のクラスメイトになる六條 紗希様です。かの有名
な六條グループのお嬢様にあたるお方です」

六條グループ。

今、日本で有名な三グループのなかの一つ。

主に技術を担当として、それは自動車や電車、そして航空といつ
た場面でたびたび姿を見せる。

総資産は計り知れなく、小さな国なら買収できてしまつくらいの
資産があるだかないと言われている。

「六條グループのお嬢様……」

今になつて気付いたが、僕はすごいところに来てしまつた。
それよりも僕は。

「何がガラス玉だよ」

あれは確かに宝石だ。

六條グループの至宝だ。

それなのに、そう思つても。

なぜか彼女がガラスに見えてしまった。

そして今も。

僕はなぜかガラス玉の方がしつくじときいていた。

「ささ、ここが恭一様の教室でござります」

それから美術館のように多少絵画を眺めながら歩いていたら、すぐ僕の教室に着いた。

ここまで来て改めて緊張する。

それこそが入学式で張り詰めているといつのこと、その空間に異質のような人物がやつてくる。

みな、張りつめた状況の中で一人で教壇に立ち自我紹介。僕は少しだけ足が震えそうだった。

「話は初めに通しておりますので、そんな緊張なさらずとも大丈夫ですよ」

そんな僕の気持を察してか、こんなときでも昭文さんは僕を支えてくれた。

僕は意を決したように昭文さんに頷くと、教室の扉をノックした。

「失礼します」

ここまで来たらもう後戻りはできやしない。

僕は教室の扉を開くと恐る恐る中に踏み出した。

そこはどこにでもありふれた教室の一つだった。

廊下とは違い、華美な雰囲気ではなく。

それでも教室自体は新しく綺麗なわけだが、大して目を引くようなものはない。

「ようやく来ましたか」

腰に手をやり快活そうな笑みを浮かべた女教師。

不思議そうな顔を揺らす、生徒たち。
そう、それは何もかもが当たり前。

当たり前だと思っていた。

「ほーらいつまでそこに突っ立つてるんだ」
僕は急いで、先生の横に立つと、改めてクラスを見回す。
やはりというか、僕の人生には当たり前など許されない。
というか、この状況を僕にどうしろと。
そこに広がった光景は、

一面、女子、女子、女子、女子。一名だけ男。

「えつえええ!?

「みんな喜べ、我がクラス一人目の男だよ」

と、同時に先生は僕に自己紹介と耳打ちした。

「え、えつと僕の名前は秋里 恭一といいます……これからよろしく

く

ありきたりすぎる自己紹介。

途中かまなかつただけよしとしようと。

いやいや、かまなかつたとかじやなくて、問題はそこじやないし。
「と、言つわけだからみんな秋里をよろしくな」

ざわざわと、クラス一同騒ぎ出す。

なんか勝手に話は進められていく。

なんだか恥じくなつて顔を下げるが、先生が席を指示する。

「んじや、秋里は窓際の一一番後ろな。ほりちよつど男子の後ろの席だ

せいぜい少ない男同士仲良くやりなよ。

なんて笑いながら言われる。

僕は疲れたように指定された席に着くと、このクラス唯一の男に声をかける。

「なんか、大変だけどよろしくね」

僕の前の男子生徒は、僕に振り返り紳士的な笑みを浮かべた。

「秋里君でしたね。私は滝^{たき}氷也^{ひょうや}と言います、これからよろしくお

願いしますね」「

そう、これだ。

僕はこういうのを待っていた。

当たり前のようなふれ合い。

僕はそれを求めていたんだ。

少しだけ心が温まる。

「ほらほらみんないつまで騒いでいるんだ。連絡は終わっていないぞ先ほどまで騒ぎ合っていたものたちの声はすぐに静まる。」

「では、またあとで」

そういうて滝はもとの規則正しい姿勢に戻る。

「それじゃあ連絡事項に戻るぞ……」

当たり前の教室。

当たり前のクラス。

当たり前の生徒。

当たり前の授業。

僕はそんな生活にあこがれた。
そしてここにはそれがあつた。

少しだけくすぐったかった。

新しい風に当てられたのかもしれない。

僕は一番後ろの席で窓の外を見て笑った。

あんなに遠いと思った物がこんなに近くにあった。

僕は空を見上げた。

そこには透通るような蒼があつた。

それはすべてを包み込むような優しさ。

ここからすべて始まる気がした。

それは春の陽だまりのような暖かい瞬間。
僕はそれを永遠だと思った。

しかしそれは瞬間であって永遠ではない。

それでも僕はこの時間が長く続けばいいと思った。
願わくば平穏な日々を、と願ってしまった。

内心どこかでは気づいてしまっていたのかもしれない。
この空間の異常さを。

それはまだ眼には映らなかつたが、何かを僕は感じ取つてしまつた。

それでも僕は見ないふりをした。

だって、目の前に心地よいものがある。

それにひと時でもすがるのはいけないことなのだろうか。

僕は静かに目を閉じた。

それは、新しく始まる日々のお話。
僕はそれが幸せに終わることを望んでいた。

第二話 【帰り道、僕と君は笑い合った】

気がつけば、ホームルームが終わっていた。
窓の外に視線を走らせながら、僕は先生の連絡を聞かずにつれか
らの生活を思い描いていた。

「もう終わったか」

すでに教室には先生の姿はなく、教室にいる生徒も二三人しか
少なくなっている。

それと同時に、なんだか一気に緊張感が抜けた欠伸が出る。

「おや、秋里君お疲れですか」

僕がちょうど大きく口を開けたところで前の席に座る氷也が振り
返る。

「ああ、うん、ここまで色々あってね」

そうですかと、にこやかに笑う。

どうやら彼の表情の80%は紳士的な笑顔で出来ているらしい。
「ああそれとちょっとといいかな。秋里君っての呼ぶのやめてくれな
い。なんかよそよそしいからさ」

まだ会つて一日もたつていないのでよそよそしいはないが、そ
の名称で呼ばれるのは好かなかつた。

一瞬考えるように氷也はどこかに視線を向けると思いつたよう
に笑顔を浮かべる。

「では、キヨウと呼ばせてもらいます。私のことは氷也でいいです」

「ははは、キヨウね……うん、これからよろしく」
名字で呼ばれるよりもだいぶましだが、キヨウって……。
親しげだから別に良いんだけどね。

「こちらこそよろしくお願ひします」

そういつと丁寧に氷也は頭を下げた。

なんとこゝか、ものすごい堅苦しい。

僕は氷也の横を歩きながらそんなことを思った。

僕らはホームルームが終ると、それ以上やることもなく、帰り支度を済ませた。

僕は寮までの道のりが分からなく、氷也に道案内を頼むと、快く了解をしてくれた。

しかし、なんかしつくりこないんだよね。

僕の横を歩く氷也の姿は、まるでモデルのようすりあつとしていて、華麗だった。

寸分の狂いもなく進められていく歩幅になぜか眩暈がする。それと初めから気になっていたのだが、そのじてつじての口調。それがちょっと堅苦しかった。

「なあ、なんで氷也はそんな口調なんだ」

僕は話の隙を窺うと先ほどから気になつて仕方ないことを訊ねた。

「え、私の言葉が変ですか」

それに対しても、そもそも僕の言つてこる「どがおかしいよみうな表情を浮かべる。

「変つて訳じやないんだけどね、なんか堅苦しいんだよね」

特に、自分を私と呼ぶ男なんて見たことがない。

「ああ、それでしたか。こればかりは私の口からはなんとも言えないんですね」

そういうつて苦笑う。

僕はそこでどうしてか、ふと気がついた。

ああ、そういうことなのだと。

彼がどうしてそんな口調なのか。

彼がどうしてそんな姿勢なのか。

彼がどうしてそんなに丁寧なのか。

僕はなぜか気づいてしまった。

ここは、西勾華学院なのだと。

「そっか、けどま、そういうのも悪くないかもな」

少しうなだれながら歩く氷也に笑顔を向ける。

「多少堅苦しいけど、紳士的に見えるよ」

そういうと氷也は顔をあげた。

「キョウ……」

そう、彼と僕とは別の世界の人間なんだ。

その堅い口調も、華麗な姿勢も、丁寧な応答も全部、彼の家柄が成す技なんだ。

そして、それを無遠慮に指摘した僕の発言に対する反応。

僕はなんて愚かだったのだろうか。

そして彼はなんて悲痛そうだったのだろうか。

そこに何があるのかはわからない。

家柄の差がなんであるかなど分かない。

けど、氷也は今まで幾度となくそれを身に刻んできたのだろう。

そう結論に至ると、僕は小さく笑った。

「キョウは私が変だと思いませんか」

氷也は脅えるような眼で僕を見つめる。

僕は静かに首を横に振った。

「多少、堅苦しいと感じたが、それが氷也なんだろう」

そして、僕は前を向いて歩きだす。

「キョウ、ありがとう」

僕は少し照れくさくなつて、聞かないふりしてそのまま前に進む。

「もし、もしな。いつか氷也が僕を信頼して話せるようになつたら話してくれないか」

僕は歩くのをやめ、氷也の方を向く。

それに対しても氷也はいつものような笑みを浮かべ、小さく頷く。

「その時は、私から聞いてくれるようお願いします」

「 そうか」

そして僕らはしばし、その場にとどまつた。

お互に会話はなく、それでいて微妙な空氣でもなく。

「 ほら、キヨウ。いつまでも止まってないで歩きますよ」

僕はその言葉に反応し歩き出す。

「 お、おう。氷也も遅れないで速く歩きなよ

そういうて僕はずかずかと前に進む。

「 ちょ、ちょっとキヨウ」

後ろから呼び止められたのを顔だけ向けて、怪訝な表情をする。

「 今度は何なの」

「 いや、寮の道はこっち

氷也は僕が一人で進んでいる方向とは別の道を示す。

「 つて僕、道わからんないんだつた」

僕は思わず、噴き出した。

それをみて氷也も笑いだす。

僕はこのとき思った。

もしかしたら、僕は幸運だったのかもしれない。

いくつもの確率の中で氷也という人物に巡り合えてしまつた。

そして今ここで一人して笑い合つている。

それを幸運と言う以外になんと言えばいいのだろうか。

僕はこうして一人の友人に巡り合つた。

それはまだ友人の一人だけど、この人なら信頼できるようになる、確信していた。

まだ、色々と不透明なことだけだけど、いつか互いのすべてを理解した時。

僕は彼を親友と呼べると思う。

いや、僕はそうであつて欲しいと願つてしまつた。

これが僕と氷也の出会いだった。

第四話 【虚うな人形の瞳に映るものはなぐ】

僕と氷也は寮につくまで、他愛もない会話を繰り返した。

「人の、思いは多少違えどもそれはそれでなにかと話は弾んだ。
「ところでキヨウ、夕食はどうしますか」

会話の端で氷也は思い出したよし、僕に質問を投げかけた。
突然の転入で生活に関する諸々の事項が全くと言つていいくほど無
知であつた僕は、寮での生活がどのようにあるか分からなかつた。
そのよしを氷也に伝えるとわかつたように笑顔で頷いた。

「基本的な生活方法は多分、今までと変わらないと思いますが、そ
うですね」

氷也は考えを巡らせながら喋つていく。

洗濯物は共同の洗濯部屋があり、男女時間帯に分かれていること。
部屋の掃除は寮の管理者たちが定期的に行つてくれるため、自分
で掃除する必要はめつたにないこと。

何か欲しいものがあれば、管理者に連絡すれば、可能な限りそろ
えてくれること。

それと家具やその他生活雑貨は、すでに備え付けてあるとのこと
だった。

「なんかこここの寮つて、いたせりつくなんだね」

僕は驚きのあまり苦笑いを浮かべた。

「そうですね、その他基本的なことも全て管理者が行つてくれます
ので、心地よく生活できます」

眩暈がする。

氷也みたいな、多分生糞のおぼつかまことつては普段通りでも
僕にとつてはがらりと生活が変わつてしまつ気がする。

もう週末にあたふたとしながら掃除機を抱えるなんてことはない
のだろうか。

その代りに、同級生と週末の優雅な午後の一時を、紅茶片手に過

「」じてしまつのだろうか。

「どうしました、頭を抱えて」

いや、断じて否。

僕には庶民の生活の方が性にあつてゐる。

こんなところで、心折られたりなんかしない。

「それにしても、その管理者つてのも話を聞いている限り多くの人数がいそうだけといつたい何なんだい」

生徒全体の生活のほぼ全てを支える管理者。

これから世話される身にとつて、その人たちを知らないわけにはいかない。

「管理者ですか。管理者とは名ばかりに普通のメイド集団です」

「ああ、普通のメイド集団ね……ってメイドー？」

メイドといつたらあれだよな。

お帰りなさいませ」主人さま。

なんて僕が帰つてくるたびに言われたり。

最近では、ツンデレなるものが流行つてゐるらしい。

もしかして、いや、でも……。

「大丈夫です、キヨウが思つてゐるようなものではありますんから」

僕は考へてゐることを見透かされ、思わず肩を震わせる。

「おや、かまかけたつもりでしたが、その様子では本当のよつですね」

こんな時でも氷也は厭な笑みを浮かべず、紳士的に笑う。

ちょっとコイツの口封じたくなりました。

しかもその話はいづれ、などとぬかしやがりますから、本格的に口を封じたくなりました。

「メイドと言つても娛樂的なものではなく、本来のなサーバントの意味でのメイドです」

けど、しつかりメイド服は着てますよ、と氷也は僕に向けてウインクする。

もういい加減その話題から離れてほしー。

「ううと、その話はここまでにして、最初に言つていた夕食がどうとかについて教えてくれないか」

「ああ、そうですね本題はそっちでしたね」

「お遊びが過ぎてすっかり忘れていましたよ」と聞く分に僕はだいぶ遊ばれていたらしい。

「ここでの食事の形式は、特に堅いマナーはなくワイヤードで楽しく食事する場所だと思ってください」

主に食堂を利用する時は朝と夜。

学校のない日でこそ昼食があるが、基本は朝晩。

食事できる時間は、朝は七時から八時まで。

夜は六時半から七時半まで。

食堂は常に開放しているが、食事提供は時間内でしか行われない。しかし、何らかの原因があつて、その時間帯に食事出来ないときは時間外でも食事出来ることがある。

意外と時間に厳しいように見えて、寛容にできていることだつた。

「それで、よければ」一緒に夕食をいただきませんか

僕は特に予定はなかつたし、その提案は僕から申し出たいといつだつたのでもちろん了解した。

その後、僕たちは寮に着き、まだ部屋の分がない僕は氷也に連れられて管理人室に連れられた。

「よう、御出でなさいました、秋里様。それと滝様も案内させめるような形になつて申し訳ありませんでした」

氷也はいつもの笑みで、いえいえことわると、一度頭を下げた。

「私が望んで行つたことなのでそう、謝らないでください」

「そうですか、では後はこちらで案内しますので、滝様はお部屋でお休みください」

滝はもう一度礼をして、僕に口だけで、また、と言つと華麗に歩き去つて行つた。

「すみません、御挨拶が遅れましたね。わたくしここの支配人を務めさせていただいております、相沢 夕美と申します」

そう挨拶すると、柔軟な笑みを浮かべた、気品ある女性が頭を下げた。

見た目的に言つと、良く分からない人だつた。

確かに大人っぽい雰囲気はあるのだが、それでいて柔軟な笑みからは、あまり大人っぽくない。

僕は相沢さんが頭を下げたのに對して、頭を急いで下げるが、相沢さんは少し笑つた。

「秋里様は下げるでもいいのですよ」

「秋里様はここにいる人たちとは少し変わつていますね」

そして相沢さんは、はあつとしたような表情に変わり、急いで訂正した。

「変わつていいとは良い意味でのこととして、気を悪くさせてしまつたのなら謝ります」

「いえいえ別に気を悪くはしてませんので、どうか顔をあげてください」

それに自分でも変わつていいとこで気付かされましたと笑う。

そんな表情に、相沢さんも笑つた。

「あなたなら、もしかして」

小声でつぶやく相沢さんの声が聞こえた。

「どうかしましたか」

僕は首を横に傾げて訊ねると、相沢さんは慌てて手をぶんぶんと振つた。

「い、いえなんでもありません、どうかお気になさらず」

一度、慌てていたような姿を見せていた相沢さんはたつた一回の深呼吸で落ち着くと、あらぬ方向に向かつて声をかけた。

「ヒトミさん

小さく呟くと、一人の少女が現れる。

先ほどまで、誰の気配もなかったのだが、彼女はそこそこるのが当たり前のよう黙つて頭を僕に向かって下げる。

そんな状況を相沢さんは別段驚かずに、無言でヒトミと呼ばれた子に頷いた。

ヒトミもその頷きの意味がわかつたらしく、深く頭を下げる。

「それでは秋里様、今日からあなたの世話をこの子に行わせるのを何かあればこの子にどうぞ」

そうこうと、ヒトミの背を軽く叩く。

「……今日から秋里様の身の回りの世話をさせていただく、月宮

瞳

と

言います

よろしくお願ひしますと、囁くような小さく声で自己紹介する。

その口調は確かに僕に向かっているのだが、しかし。

彼女の眼は虚ろで、僕には向かっていなかつた。

「……それでは部屋に案内します。付いてきてください」

それだけ言つと、僕の返事を聞かずに歩き出す。

僕は唖然としたまま立つていたが、僕はすぐに彼女の後を追つよう歩いた。

相沢さんは笑顔僕に手を振りながら見送つていた。

「どうか、どうか虚ろな子に心を。

あなたなら、いやあなたしかいない。

どうか、あの子を救つてあげてください」

嘆くようなその言葉は静かすぎる廊下に染み入るよう響いた。

しかし、その声は誰にも届くことなく消えていった。

気まずい空気だった。

長い廊下に一つの影。

その一つの影はお互い干渉することはない。

一方は干渉しようとしたが、ただ案内する使命だけに忠実で。もう一方は干渉したいのだが、その隙を掴めず。

長い廊下には、二つの足音しかなかった。

とても気まずい空氣だった。

「……あ、あの」

「これで何度もだらうか。

多分一度か二度目くらいだが、何度もしているような錯覚に陥る。僕はこの空氣を打破しようとして何度も声をかけるのだが、そのたびに瞳は足を止め僕より少し先を歩く彼女が振り向く。冷たい眼だった。

別段睨んでいるつもりもないのだろうが、それといって興味のない眼。

言葉で表せば、感情のこもらない眼。

僕が声をかけるたびに、律儀に足を止め無言でその眼を向ける。僕は、その眼を見ると声をかけてよかつたものかと押し黙つてしまつ。

そんなお互に黙つた状態が数秒つづくと、彼女は再び前を向いて歩きだす。

僕には黙つて付いていくしかなかつた。

それから少しだけ歩いた後、彼女は一つの扉で足を止める。

「……ココ」

口数少なく彼女はそう告げると、再び僕をじっと見つめる。

僕は何を言えばいいのか分からずに佇んでいると、彼女は踵を返した。

唚然と突つ立っている僕のことを一度も見ずに歩き去つて行つた。

「ちょ、ちょつと」

慌てて振り返つたが、そこにはもう誰もいなく、長い廊下が広がつていた。

「あ、あれ」

一人取り残された僕は呆然と立っていた。

この案内された扉にかかるているネームプレートが僕の名前であつたと気がつくまで僕はその場で途方に暮れていた。

「瞳、か」

僕は彼女を思い出しながらつぶやいた。

とらえどころのない、雲のよつたな女の子。

僕よりも頭一個分ぐらい小さな小柄な女の子。

年齢は、一度見ただけでも僕よりは幼いとわかる。

そんな子が虚ろな瞳をしたまま、この寮で働いている。

「おんなじくらいかな」

僕が、彼女の姿に胸が痛んだ。

それは僕が昔犯した過ち。

「ユ、キ」

僕はもう一度と呼んではいけない人の名前を呟いていた。

「ユキ」

僕は夕日が沈む窓越しで少しだけ涙を流していた。

第五話 【幸せな時間は速すぎた】

「そういえば、氷也と夕食の約束してたつけ」

壁に掛けた時計を見れば、夕食にはいい時間になっていた。

僕は制服を着替え、多少ラフな格好になると部屋から廊下に出た。

夕暮れ時、一田の黄昏を魅せるように廊下の窓から眩いばかりに西日が射しこんでいた。

廊下を幻想に染めていくその景色にひと時眼を奪われていると、前方から乱れのない足音が響いてくる。

「これは、これはどうやら時間通りだったみたいですね」

赤く染まる幻想世界から顔を出したのは、黄昏に負けず劣らずの優雅な男だった。

「氷也、よく僕の部屋が分かつたね」

それに対して氷也は言葉は発さずに笑っていた。

その表情が気持ち悪かったのはあえて言わないでおこう。

「そんなことよりもキョウ、もう良い時間なので食堂にでも行きましょうか」

「そうだね、僕もちょっと腹が減つてきたところだったよ」

さあ、こっちですと、氷也が案内するように歩きだした横を僕も一緒になつて歩き出した。

途中廊下にはいろいろな学生にすれ違つて行つた。

「この時間は食堂にはほぼ全生徒が集まりますからね」

氷也がそんなことを話す横で、僕は全生徒が収容する食堂を想像した。

僕の知つている食堂は、戦場だった。

時間になると寄つてたかって集まる生徒の波に取り残されないようまずは席を確保しなければならない。

周りには席を確保できず、うらうらと歩き回る生徒。色々な声が混ざり合つ喧騒とした気配。

食堂のおばちゃんの前にできる長蛇の列。

僕が思いつく食堂はそんなものばかりだった。

「急がなくても大丈夫なの」

僕は少し不安になつて氷也に訊ねる。

「急ぐものですか……あつ、そんなに空腹でしたかそれに対しても外れな回答を返される。そういえば。

僕はあたりに視線を回す。

僕の周りには大勢の生徒がいる。

しかしその誰もが焦つた様子はなく、余裕をもつて歩いている。

「これが、金持ちの嗜みなのだろうか」

僕は場違いな空気に委縮していると、眼の前に大きな扉が現れる。

「ようやく着きましたよ」

僕に向かつて、満面の笑みを浮かべると、氷也はその扉をなんの遠慮もせずに開く。

そしていつの間にか僕の眼前には信じられない光景が浮かんでいた。

どこかの金持ちが催すパーティー会場。

はじめに思い浮かんだのはそんなありきたりなものだった。

「つて、ここが食堂ナノ?」

思わず語尾が浮き上がる。

僕はその眼の前に広がつていいく煌びやかな世界に目がくらんだ。信じらんないようだに広い空間。

空中で優雅に輝いている、巨大なシャンデリア。

塵ひとつないのではと疑うほど綺麗に掃除された床。

その他にも日々信じられないような状況がそこに広がっていた。そこは金色の世界だった。

「かつて、ある異人（　偉人）が言つたんだ。ジパングはまさに

黄金狂（　黄金卿）」

いまならその偉人に頭を下げようと思つ。

今まで馬鹿にしててごめんなさい。

歴史の教科書に落書きしてごめんなさい。

「どうしましたキョウ、眼が死んりますよ」

僕がトリップしている間、氷也はまるで当たり前のよつな顔をしている。

「そんなところに立つてないで早く席にこきましょ」「う

そう言い残して氷也は黄金の中に踏み出していった。

「ま、待つてくれ。僕をこんな異世界に取り残さないでくれ」

僕も恐る恐るその世界に踏み込んでいつてしまつた。

「こ、これが歴史に残る一ページなのかあ」

周りから白い眼で見られながら僕は氷也に置いてかれないよう

に早足で着いていった。

金属音が擦れあう音と、食事時にはちょいちょいボリュームの会話が耳につく。

先ほどまでは優雅に見えたこの空間も、みな一様に笑みを浮かべながら食事を嗜む光景に少しだけ安堵する。

ここに生徒は名家の御子息やお嬢様ばかりなのだが、ふたを開けてみれば年相応の男の子や女の子だった。

そう余裕ができると、僕は平常心を保つて氷也に訊ねてみた。

「なんだか、食堂らしくないとこりだね」

食堂よりもむしろヨーロッパの古城の舞踏会と言つたほつが頷ける。

「それはやはり、全校生徒が食事出来るよつに配慮したのではないですか」

確かにこのぐらこのスペースがあれば粗暴な争いをする人はいな

いだろう。

その意味では食堂と言つ意味では特化した場所なのだろうか。

「それはそうと、さつきから開いてる席はいっぱい見てるけどどこ行くつもりなの」

氷也と一緒に歩いてくるつむぎに向かってくつもの開いている席を見つけたが、氷也はそれを見向きもせずに黙々と進んでいく。

そんな僕の問いかけに氷也は楽しそうな笑みを浮かべて、振り向く。

「それは着いてからの楽しみですよ」

それだけ言うと、一層楽しそうに氷也は進んでいく。

僕は首を傾げながらも、彼の後を付いていくしかなかつた。

「おや、あんなところでしたが」

僕はさすがに席に座りたいと思い始めたころに、みづやく氷也は探し物を見つけたのかそんな言葉を口にした。

「キヨウ、お待たせしました、ようやく席に着きましたよ」

そう言って、前方の席を指さす。

そこには四人掛けのテーブルに一人の女の子が座つていた。

「いや、でもあそこは誰かいるじやんか」

周囲にはいくらでも席は空いているのに、なぜその席を探したのか疑問に思つた。

「だからいいんですよ」

そう言って氷也はそのテーブルに向かつていく。

「ちょ、ちょっと待つてよ」

僕の静止には耳を貸さずに当たり前のように氷也はテーブルに座つている女の子に声をかけた。

「少し遅れましたね、由夏」

何気ないような自然な口調。

そしていつもと変わらない氷也の笑顔。

「あつ、氷也、遅れすぎだよ」

それに対する当り前の応答。

遅れたことを指摘するがそこには何も非難はなく快く氷也を迎える笑顔。

たつた一度の交わすだけの会話を聞いただけで一人の仲の良さが頷ける。

「今日は、由夏に紹介したい人がいましてね……ほらキョウもこっちに来たらどうですか」

この突然始まった展開についていけず、その場から動くことができなかつた。

氷也に声をかけられてもどこか上の空で一人を眺めていた。

「どうやら、キョウは照れ屋なようですね」

反論したくなるような、けど反論できないような事を言ってくる。

「ち、違うよ、僕は別に……」

「それなら、早く席に座りましょう。私でもさすがにお腹がすいてきました」

氷也は僕の分の席を引きながら自分の席に座つた。
僕も少し納得できなかつたが渋々自分の席に座つた。

僕たちがそろつてからすぐにテーブルには食事が並んでいつた。
どうやらここでは、自分から食事を取りに向かうのではなく、給仕の人が料理を運んでくれるシステムらしい。

なにやら先ほどからこそそと話している一人を気にしないようにして、華麗に料理を並べていく給仕の人を眺めていた。
給仕の人が料理を運び終え、一礼して去つて行つた後も一人の会話が終らなかつた。

僕は興味を向ける対象が無くなりその場で落ち着きなく視線をめぐらせているとようやく一人の会話が終つた。

「そういうわけです」

そんなことを僕と目の前の女性に言つたわけだが、僕はなにがそういうわけなのか分からない。

しかし、その女性は何度も頷くと、氷也に合図した。

「えつと」

「ほんと、何かの準備のよう」一いつせき扱いすると、女性は僕に向き直つた。

「まだ混乱してる所に悪いけれど、私の名前は小松由夏、よひじくね」

とつつきやすそうな笑顔を浮かべながら、右手が差し出される。今時握手だなんて恥しく思いながらも、突然自己紹介されたことに焦り僕も右手を差し出してしまつた。

「僕は、秋里 恭一といいます、じちらいりやよろしく」

多分、僕の顔はいま真っ赤になつていてるだろう。

僕は由夏と握手をしながらも氷也を睨みつけた。

「おや、キヨウ顔が真っ赤ですよ」

自分の田論見がうまくこつたところ、氷也は嬉しそうにしている。

「つるせこ、つるせい」

僕は頬が熱くなるのを感じながらも氷也を睨みつけた。

「また、お遊びが過ぎましたか。それよりも、せっかく料理が並んでいますので冷めてしまつうちにいただきますか」

そういうと、なんともなかつたように氷也は料理に口をつけた。僕と由夏も頂きますと口にすると、お皿に料理を盛つていつた。

「この料理は初めてだつたが、僕はそのあまりのおいしさに箸が進んでいた。

今日は和食がベースだったので、五田御飯を基に様々な定番の和食料理が並んでいた。

僕らはしばしの間料理に舌鼓を打ちながら、たくさんのこと話をした。

由夏は僕たちと同じクラスで、氷也とは小さじからぬ馴染みだつたということ。

僕と氷也が仲良くなつた経緯や、氷也と由夏が仲良くなつた経緯。

しまいには由夏は僕のことを、氷也と同じように「キョウ」と呼ぶようになり、すぐに僕ら三人は打ち解けていった。

「さて、そろそろ食事も終わりましたし部屋に戻りますか」
時間は急速な速さで進んでいたと思われるほど時間となり、先ほどまで大勢いた生徒は半分もいなくなっていた。

「そうだね、もうお腹いっぱいだよ」

僕は席からのぞりと立ち上がり、満腹感に浸つた。

「あはは、キョウなんだか幸せそう」

隣ですっかり馴染んだ由夏が楽しそうに笑つた。

もうすっかり僕たちは友達になつていた。

そういうことも踏まえれば僕は本当にこの夕食で幸せになつたのかもしれない。

「それじゃあ

由夏と途中で別れ、氷也と歩いていると僕の部屋に着いた。
ここまで歩いてくる途中もいろいろなことを話してきた。

どうにも氷也は話し上手らしく、僕と氷也の会話が途切れることはなかつた。

「今日はほんとにありがとう」

僕はこれまで何度も氷也にお礼を言つてきただがもう一度言つた。

「いえいえ、私は私の友達を紹介しただけですよ」

それにこちらこそありがとうございましたと氷也にお礼を返される。

そのまま少しだけ僕の部屋の前で、ありがとうございましたが繰り広げられる。

どちらもお礼にお礼を返し、なんだか収集がつかなくなる。

「またこの展開ですか」

そういつてお互い笑い合つ。

「なんだか切りがないよ」

あまりの馬鹿さ加減に笑いが止まらなくなる。

一人でひとり笑い合つたあと、僕は氷也にまたお礼をした。
「氷也は当たり前のことをしてただけだったつもりでも僕は本当にうれしかった」

僕は氷也という人物に出会つたことを心の底からお礼を言った。
「それじゃあ、私もキョウに出会えてよかつたのであいこですね」
「まだまだ、言い足りないけどね、今日はあいこつてことにしておくよ」

このまま続けるといつたらいつ終わるのか分かつたもんじゃない。
「そうですね、こんなところですと討論していれば見世物になってしまいますね」

「じゃあ、僕はもう部屋に戻るね」

そう言って、部屋の鍵を取り出す。

「私も名残惜しいですが、明日すぐに会えますしね」

氷也は小さく頷くと手を振つた。

「ああ、おやすみ、氷也」

「おやすみなさい、キョウ」

それを挨拶に僕は自分の部屋に戻つて行つた。

「今日はたくさんのことがあつたな」

就寝の用意を終えるとベットに転がつた。

「学校行つて、学校行つて、氷也にあつて、由夏にあつて」
考えると今日一日で濃密な日を送つていたことに気づく。

「これからもこんなに楽しい生活ならいいな」

これから学校生活を思い浮かべる。

そこには僕と氷也と由夏とその他クラスメートと楽しく生活する姿が浮かび上がる。

「うん、きっと楽しくしてみせる」

だつてこれから僕の生活が始まるから。

今まで望んだ生活が始まるから。

「そう、僕はここで平穀を手に入れるんだ」

すぐに僕の思考はまどろみに飲み込まれていく。
僕はこれから起くる日常に希望を抱いた。
それはそれは、誰もが手にはいる輝くような日常に対する憧れだ
つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8909c/>

遠く、澄み渡る空に想いをこめて

2010年11月14日09時18分発行